

# 開會思想

遠藤是妙

開會の二字は法華經の思想を全的に言ひ顯はすき文字である。法華經の山なる身延山の關門に、開會關と記されたる六牙潮師の三大文字は、この御山に最も相應せる額面として、毎に合掌拜觀しつゝ通過するのである。然るに文明の機械が思想界にまで影響するものゝ一ツとして、電車自動車等の交通は、參拜者に對する難有き恩惠なると同時に、尊き靈蹟を逸せしめるのみならず、御山の幽邃深嚴味を損滅する恐れがある。今の開會關の如きも幸に車掌の説明を聞いたものは、其の瞬間車窓より一瞥するに止まり、但だ大きな草書であつたと思ふばかりである。偶々山内にあつてさへ、祖師堂あるを知つて棲神閣あるを知らず、總門あるを知つて開會關あるを知らないものがある。自分は先日佐々木師の施本感應院日得聖人の報恩誌を得て、聖人を回顧すると同時にこの開會の感を新にしたのである。

開會といふことは宗門の學者にとりては、殆んど常識的に考へられながら、この位謬られ易い思想はない。そこでこの開會思想に對する認識を確にする必要があると思ふ。

開といふ字は、開顯・開發・開除・開廢等と熟字して、隱覆蓋覆を取り除く意味と、同時に法門の内容真相を明かにする意味なれば、この一字でも門戸開放内外融通眞相發揮の状態は能く領解が出来る。其の上に會は會融・會歸・會合・會入等と熟字して、恰も百川の一大海に朝宗するが如く、差別の諸法を一ツのものに歸入せしむる意味であるから、開會といふ時は直に眞理顯彰、諸法統一、平等無差の綜合的名稱と心得べきである。是の如く考へるとき開會

の思想は但だ法華經に限るべきであるが、佛一代の聖教に於て、凡そ圓理を説く處又幾分開會の思想がないでもない。故に吾祖は一代大意鈔（一八四）に爾前の圓として、華嚴・淨名・般若等圓理の證文を擧げ來りて、「少々開會の法門を説く處もあり」と仰せになつて一往法華以前の開會をお許しになつて居る。然し通漫に法體教理の融通を以て開會と見なすならば、佛教に限らず他の宗教及び哲學思想中にも、之を見出すことが出来るであらう。其では開會を以て法華最勝の妙用、法華思想の全的表現などと珍重すべき價值はないと思ふ。加之このまゝ粗略に考ふるならば爾前も法華も念佛も題目も同じと云ふ思想に煩ひされ、やがては權實雜亂の大謗法に墮することであらう。吾祖の所謂「日本國の謗法は爾前の圓と法華の圓と一ツといふ義の盛なりしよりこれはじまれり」との御言葉は移して以て吾等が將來の警告とせねばならぬ。そこで更に開會の眞意、内容、目的等を研覈して見ると、容易に前述の如く簡單に説明しては措けない。即ち開會の意味は前の通りに相違なけれども、立名の所以は正に法華にあるので、根本は法華の妙旨を發揮すべき大事な法相なのである。その言葉丈を暫く爾前の圓教に寄せて觀たまでに過ぎないのである。言ひ換れば法華開會の後、更に爾前を顧みてその法味を再吟味し、その法門の價值批判を試みたに過ぎないのである。

されば開會は法華の妙を顯はすべき主要の法相で、法華思想を其まゝ顯はす言葉だとも云へるのである。即ち天台の玄義（二上四十四左）には「二に妙を明さば通して二となす、一には相待二には絶待なり、此の經（法華經）は唯二妙を論ず」（原漢文）とありて、相待に妙を論ずる時には、今（法華）昔（爾前）彼（爾前）此（法華）相對し、彼の昔の鹿の教を破廢して今の教の妙なるを示し、絶待に妙を論ずる時には、權即實三乘即一乘と開會するが故に、實の外に權なく一乘の外に三乘なく、全く今昔隔會の法の別なきを彰はして、正に法華の獨妙を論ずるのである。故に前者は一往彼此の鹿妙を判じ、後者は施權の彼を開會して、法華の實法に歸納して見れば、本來この實法の本心から、施權

の諸法を分別したのだから、皆一實の妙法となつて、彼此權實の相はなくなるのである。是を宗祖は總勘文鈔（一八九七）の中に「四十二年の夢中の化他方便の法門も、妙法蓮華經の寤の心に攝まりて、心の外には法なきなり、此を法華經の開會とは云ふなり」と仰せになつてゐるのである。即ち爾前の諸經は法華の眞實を顯はさんが爲めの權謀なるが故に、法華の實が顯はるれば爾前の權謀を要しなく、凡ては法華經體内のものとなつて、比較すべき何物もなく皆法華の一乘法となつて、恰も權經の存在を亡じた形になるから、開の時即ち廢すとも言はるゝのである。されば宗祖は「絶待妙と申すは開會の法門にて候」（縮遺九八）と仰せになり、併せて謬り易き思想を警戒して居られる。

是の如く絶待妙の意は、一代聖教を其まゝ法華經なりと開會すれども、法華經こそ能開の妙で、爾前經其他一切の法を能く開會する妙用ありとなし、爾前經等はこの法華經によりて開會せらるゝ所開の法と定めて（遺文一九五、四九三）開會の主體を明にすべきである。隨て諸大乘經中の法門も、法華の爲めの部分法として、或る時はこれを開會して活用し、又或る時は法華經の開會によりて、諸經當分の教益を究竟せしめる妙術をも含まれて居るので、開會は又淨化・活用・成佛をも意味することになるのである。（御遺文一八九七、一九一一）この場合逆即是順と相對的に開會するのと、小善を其のまゝ大善と同種類に就て開會するのと、二た通りあれども今は之を略する。

然らば前に述べたる法華以前の開會とは如何、華嚴・方等・般若等諸大乘經通同の圓理を、法華部より且く教に約して別して與へる邊より、少々開會ありと説くので、諸味の圓教は更に開すべからずといふものは是である。然れども部に約して通じて奪ふ時は、諸味の圓教は皆多少權を兼含して居る故に、悉く所開の法となること前述の通りである、但し爾前に許さるゝ開會は法のみ開會で、人の開會は法華經に限るとせらるゝので、その版圍に既に廣狹の差のあることだけはよく解る。更にその内奥の眞理を研覈する時は、但だ圓融相即の妙理と言ふだけで、圓教と稱する

一部一帙の經典があるのでなく、左様な教理を含んで居ると云ふに過ぎない。故に法華よりその部の正意としての教理を認めて法開會とすれども、華嚴は佛陀隨自の内證、方等は彈訶を主としての小權對破なれば、開會の意顯はれず般若部は法の融通を目的とするので、聊か法開會と稱することが出来るまでである。其の法門の内容としても、法華の如き諸法實相十界平等の眞理が顯はれざる限り、法のみが開會も未だ完全とは言はれぬ。況して爾前の開會は各其部内に限られてゐるが、法華の法開會は總じて一代聖教を所開の法とする。故に吾祖は「法開會の文は方等般若にも盛に談すれども法華に等き事なし」(御遺文六六六)と仰せられたのである。

其上に法華迹門の開顯に於ては、開權顯實に於て爾前の權の教理を開會し、會三歸一に於て爾前の權の行人を開會し、圓滿なる法の開會の上に、爾前に絶へてなき二乘人天等廣く九界の衆生を開會して、等しく一佛乘に會入せしめた。是が諸經に秀でたる人の開會で、この時には開會によりて五具の思想がよく顯はれてくる。即ち皆成佛を目的としたものである。是の如く迹門の四一開會の上に、本門の開顯に於ては、伽耶近成の教主釋尊を以て、五百塵點久遠本佛の垂迹となし、その迹佛を開會して、本佛の實事を顯はすと共に、總ての佛界の根本的統一をはかり、迹門の四一開會に對して、本門の教理行果を顯はす、即ち本地所證の境界たる本有の實相も茲にあるのである。

以上迹門の開顯を以て、爾前の入法を開會し、本門の開顯に依て、爾前迹門の諸佛を開會し、二門の開顯を以て正に法華の開會を全うすとなすものは、尙ほ迹門に立脚せる天台の開會思想にして、本門立脚の吾祖より見れば、一切所開となるべきである。其は壽量品の顯本を塵點久遠とせば、從來の佛法を開會し得るとするも、過去に塵點の最初あれば、本當に過去常とは云はれぬ。剩へ本佛所證の境界を迹門所顯の實相とする様では、諸味の圓體同に遠からざる感じがする。乃ち吾祖は本門壽量品の文底を徹見して無始の古佛を顯はし、古佛の内證を妙法蓮華經としたので、

本佛も無始無終三世常住にして、所證の本法亦本有常住事常無作の妙法なれば、三世十方の諸佛並に所説の經法而かも今日顯説の壽量品に至るまで、悉く今の壽量文底妙法五字に對すれば、序分であり主段準備の法門なれば（御遺文九四二）五百塵點本覺の佛と雖ども、眞に無始の本佛に開會せられ、壽量品までの無数の法門も、一切妙法五字に攝まつて、妙法本佛の外には何物もなき程に、圓滿究竟の開會が行はれる。隨てこの時には偉大なる包容性も、三法一体の妙旨も、實際に發揮せられるので、是を眞に法華經の開會とも、皆成佛道とも云ふ、絶待唯一の法門觀であり、世界統一の本佛觀である。開會の思想も茲まで來なければ徹底しないのである。茲に無限大の救済力があり、茲に萬法活用の妙能あるを知らねばならぬ。徒に淺薄なる開會思想に泥んで、權實雜亂の大謗法に墮せざらんことを切望する次第である。

（十二、十、十五、在延學寮刻卒未定稿）